

アジア太平洋研究所推進協議会 第2回リレー講座 概要

日 時：2010年4月21日(水) 17:00~18:30
テーマ：「アジア太平洋のネットワーク型発展における文明(歴史・文化)観」
講 師：姜 尚中(東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授)
会 場：大阪大学中之島センター 佐治敬三メモリアルホール(大阪市北区中之島)



講 座 概 要 目 次

1 . はじめに	1
2 . 留学生活用の重要性	1
3 . 文明論的視点から見た東アジア	3
4 . 「海の東アジア」と「陸の東アジア」の視点	4
5 . 日本には「2つの楕円の中心」が必要	5
6 . 東アジア共同体への視界	6
7 . 九州にA P Iの支部を 「アジア回廊」構想	7
8 . A P Iに期待すること	9
第2回リレー講座から導かれるA P Iが目指す姿(ポイント)	10

1 . はじめに

私は A P I C の寺島議長に感じ入るところがありまして、A P I を大阪の地で立ち上げるといいますから、微力ながら何かお手伝いをしたいということで、本日お話をさせていただきます。

2 . 留学生活用の重要性

私は実は以前大阪で、コリア国際学園

という中高一貫教育校が作られる際に、理事長として協力をしようとしたが、公務員扱いなので兼職はできないということで手を引いたという経緯があります。私がその中高一貫高でやりたいと考えたことは、中国語、ハングル、日本語のトリリンガルの教育ができないか、ということでした。現在は、英語が世界的な共通言語になっているわけですが、

英語を学ぶのになぜ欧米に行かなければならないのか、アジアで一番よく英語が話せるフィリピンに行けばよいではないか、と思います。しかし、日本からはほとんどフィリピンに行こうとしていません。これは、ものの見方・考え方の、ブラインドスポットではないかと思います。例えば韓国では、英会話の勉強のためにフィリピンに行き、1~2 ヶ月でかなりブラッシュアップしてくるという安価なツアーがあり、これで英語を話せるようになっていきます。そのようなこともあって、英語は時間をかけなくても学んでいけるのではないかと考えています。

一方、私のところの大学院生で、中国語、韓国語、日本語を話せる大学院生が来ているのですが、なかなかこの3ヶ国語ができる人はいません。この人は旧満州出身で、中国人のいわゆる朝鮮族と言われている人です。この人たちは、日本語がよくできます。なぜなら、歴史的経緯があって日本はこの地域に満州国を作ったので、日本語になじみ深い人々がいて、その息子たち、孫たちに、確実に日本語が伝承されているからです。

また、10年ぐらい前に、国際交流基金の関係で、シンガポールで「We ASEAN Past and Future」という大きなシンポジウムがありました。その際の言語は英語でしたが、ほとんどが独特ななまりのある英語です。つまり、インド、シンガポール、中国、台湾、韓国、日本のそれぞれで話す英語が違います。しかし、それで十分国際会議ができるわけです。

このように、アジアの中にいろいろなポテンシャルがあるにもかかわらず、日本は語学研修と称して遠くアメリカやイギリスまでツアーで行くようなことを繰

り返してきました。しかし、自分たちの足元を見ると、英語を話せる人、トリリンガルを操れる人が、日本に対してものすごくシンパシーを持って来ています。そういう人材を、日本は今までほとんど生かしていなかったと言えます。

今後日本が中国や韓国といろいろなビジネスなどをやっていく場合、そのような人を活用できると、日本人だったらどうしても踏み込めないということも現地ですることができるようになります。そのような人材が留学生にいます。しかし、東京大学に来て、留学生は日本で就職できない現状があります。会社はそういう人達を、上に上げていけるような人材とは見なしていません。それでは実力で上がっていかうとする留学生にとっては足かせですから、アメリカに行ってしまう。つまり、「ジャパニーズ・ドリーム」がないということです。

私が言いたいことは、日本はいかに無駄なことをしているか、ということです。磨けば大変な能力がある人たちをこれまで磨いてこなかった。そのことも踏まえて私は、東京大学の大学院の中に、現代韓国研究センターというものを4月から作りました。

また、まさにAPIがそうだと思いますが、今後の日本は、知の集積の場、そして人材のフローをきちんとネットワーク型に活用できる場を作っておかなければなりません。直感として、この10年でそれができなかつたら、日本は大幅に、今のアジアのダイナミズムの中から取り残されると思います。今は江戸ブームで、「江戸の時代がよかった、パックス・トクガワーナに戻りたい」という人もたくさんいると思います。今はグローバル化

で中国も台頭して気分が萎えているので、ある種の過去志向的な、江戸時代への回帰がムード的にも起きているのではないのでしょうか。

しかし、それでいいのでしょうか。私は、もう一度目を見開いて、アジアのダイナミズムのしびきをしっかり受けて、それを打ち返していくべきだと思います。そして、その能力、ポテンシャルは日本にあると思います。



3. 文明論的視点から見た東アジア

次に文明論的視点から、現在の私たちの問題にすぐにフォーカスしないで、少し長いレンジで東アジアを見ていきたいと思っています。

1960年代に、有名な梅棹忠夫先生が、『文明の生態史観』を打ち出されました。それはアーノルド・トインビーの歴史研究に対する1つの異議申し立てでした。トインビーにとっては、朝鮮半島も日本も、ある種の中華文明のコロラリーという解釈を取っていました。それに対して梅棹先生は反論し、日本は中華文明から切れた、1つの独自の場としてであると主張しました。日本の独自性を広く世界的な生態史観の中で位置づけるという、気宇壮大な、ある種のグランドセオリーを出されたわけです。

この主張は、現在の問題を考えていく時に、示唆深いものがあります。一言で

いうと、ユーラシア大陸を挟んだ東と西で平行関係があるということです。具体的に言えば、イギリスと日本という島国は、ユーラシア大陸を挟んで、期せずして同じような発展過程をたどったということです。

なぜ日本だけが開国を通じて西洋文明を独自の形で導入し、近代国家の建設に成功したのか。なぜ中国、朝鮮半島、インド等々はそうではなかったのか。これは、西洋社会のある種の亜流として日本が近代化したのではなく、とりわけ江戸期を通じて蓄積された内発的なものがあり、結果としてイギリスが辿ったような道を日本も辿った、というのが梅棹先生の議論です。イギリスや日本のような島国に近代化が自生的に発芽したのに対し、巨大な中国、インド、ロシア、トルコ等々のユーラシア大陸における帝国は結局落伍しました。ユーラシア大陸に対して梅棹生態史観というのは、非常にネガティブな評価だったのです

20世紀は、非常に単純化して言うと、シーパワー、海の力が世界を席卷しました。19世紀末からのパックス・ブリタニカは明らかにシーパワーによるものでした。そしてその継承者はアメリカ合衆国ですが、私の考えでは、アメリカは壮大な島国です。

21世紀は逆に、大陸が大きな力を持って台頭しようとしている状況だと考えた方がいいと思います。BRICsのうち、ブラジルを除くロシア、インド、中国はユーラシア大陸です。つまり、梅棹理論では落伍したと考えられていた、陸の復権です。そう考えると、今の起きていることがある程度わかってくると思います。

東アジアは、日本が開国をしていち早

く西洋文明を取り入れ、やがて日英同盟を通じて日露戦争という形で大国ロシアに対抗したことが大きな転換点になりました。やがて日本は、17世紀以来のウエストファリア体制、つまり国民国家が中心になって世界の国際秩序を形成していくシステムの、アジアにおける最大の代理店になりました。日本が近代においてやったことは、中国を中心とする東アジアの中華秩序、朝貢体制というものをひっくり返したことです。これは大変大きなことだったと思います。

これからの東アジアを考えていく時にどうしても必要なことは、近代以前の秩序であるこの朝貢体制というものをどう考えていくかということです。歴史の教科書の中には、李氏朝鮮は清朝の属国であったと書かれていますが、それは明らかに間違っています。朝貢体制というのは必ずしも軍事力や物理的な力によって領土を制圧するわけではありません。中華の秩序にまつろい、朝貢さえすれば、その国はその秩序の中で生きていけるということです。その端的な例は琉球でした。「琉球の風」の中に見られるとおり、琉球は中国、東南アジア、日本と自由に交易していました。琉球王朝の最大の財政支出は何かというと、芸能です。朝貢システムではその保護下に入っているのです。軍事力にお金を使う必要がないからです。物品やサービスの朝貢、今で言う「文化力」を通じて、今で言う「外交力」をつけることで、琉球は我々の考えている以上に国際色豊かな地域として、ずっと存続できた歴史があるわけです。

前近代の東アジアには、ある程度自給自足的な秩序が成り立っていた時代が長く続いていました。それを打ち破ったの

は、言うまでもなくウエスタン・インパクトです。それは日本においては幕末になり、中国においてはアヘン戦争になりました。その結果、その秩序をひっくり返したのが日本の大きな役割でした。



4. 「海の東アジア」と「陸の東アジア」の視点

東アジアには、ただ単に中国、朝鮮半島、日本等があるだけではなく、かなり広範に、様々な「海の東アジア」と「陸の東アジア」が輻輳しています。これまではどちらかという、海の東アジアをあまり私たちは研究してきませんでした。しかし、寺島議長が第1回目のリレー講座の中でおっしゃった通り、海の東アジアであるASEANに対する眼差しが重要だと思います。

群島から成り立っている東南アジアは、ウエストファリア体制でつくられたような、一民族、一国家、一領土、そして均質化された法律や度量衡が成り立っている中央集権的な国家というのはほとんどありませんでした。民族、宗教、人種的に非常に多様であったので、それは当然ともいえますが、我々からすると、それは遅れた国だと見がちです。しかし、東南アジアは、国自体がネットワークになっています。日本や韓国では、東京やソウルがダメになれば国は終わってしまいますが、群島が緩やかに結びついている

東南アジアの国々は、首都が侵されても大丈夫という仕組みをとってきました。

日本は、ヨーロッパ型の国民国家の最優等生でした。日露戦争以降、1905年から45年の40年間を、「パックス・ジャポニカの時代」と言う人もいますが、その時代に韓国、中国も、日本がお家芸とした国民国家のモデルをそのまま受け入れてしまいました。韓国は、日本以上に民族意識、単一民族主義、そして主権国家意識が強いです。なぜかというと、日本を經由して国民国家のモデルをそのまま当てはめたからです。中国もそうです。中国は本来帝国ですから、多民族国家のはずですが、現在チベット問題やいろいろな少数民族問題に対してあれだけ強烈なことができるのは、やはり国民国家の原理が強いからです。その実体は漢民族中心主義です。これを、日本を真似たというのは語弊がありますが、それが実体だと思えます。

しかし東南アジア、とりわけインドネシア、フィリピン等々の国々は違います。日本にも、それらの国々との交易ルートが東アジアの海のルートとして前近代にかなりできていました。しかし近代になって私たちは陸中心から見ているので、その海のルートが見えてこなくなったのです。しかし、東南アジアに作られた、私たちが遅れていると思っていたある種の群島的なネットワーク型国作りというものが、逆に今は脚光を浴びてきつつあるのではないのでしょうか。

だから、ASEAN (Association of Southeast Asian Nations) はありますが、ANEAN (Association of Northeast Asian Nations) はありません。なぜなら、この東アジアの日中韓の3ヶ国は、

依然としてウエストファリア以来の国民国家の強い思い込みの中で国づくりをしてきたからです。ですから、南沙諸島、竹島(独島)問題等々の領土問題が起きると、二者択一になってしまうのです。しかし、国境線が陸になく、ルーズな東南アジアには、この種のことは数多くあります。

非常にタイトな形で作られてきた国民国家では、東京にしるソウルにしる、いわば中央集権的で、地方が辺境として見られていますが、このような形の政治システムというのは、耐用年数が尽きつつあるのではないかと私は思います。

5 . 日本には「2つの楕円の中心」が必要

網野善彦さんという有名な中世史家は、かつての日本には2つの楕円の中心があると言いました。1つは東京、もう1つは京都・大阪を中心とした関西で、この2つの楕円の中心がうまくかみ合い、日本は均整のとれた状況になっていました。

しかし残念ながら、20世紀は東京への集権化が進み、中央にすべての富やサービスや情報を集積させてきました。グローバル化は、これを一挙に進めた面もあります。私は、グローバル化によって多極分散型のグローバルネットワークができ上がるのではないかと考えていましたが、現実はそうではありませんでした。当然です。なぜなら、金融が中心になるならば、ロンドン、パリ、ニューヨーク、東京等々のグローバル・シティーにしか富は集積しないからです。

司馬遼太郎さんが名文句を書いているのですが、帝都東京は日本の巨大な配電盤で、電流を全部そこに集めるのと同様、人材

の配電盤が東京にあり、そこから人材を配分する。戦後日本がやったことはこれなのです。優秀な学生たちが東京に流れて行って、そこで官僚になったり、あるいはビジネスの世界の中心になって、人材を送り出した地方に富を再配分する。このようなことは中国でも今やられていますし、韓国もまさしくそうです。ですからこれらの国は、人材や情報や知識を全部ひっくるめて横に分散させていくという形がなかなかできにくかったということなのです。

これを、もう少し多極分散型にすべきです。日本なら、せめて関西・大阪と、東京。韓国ならソウルと釜山ですね。中国ももう少し分散型の国づくりにしていかなければなりません。

6. 東アジア共同体への視界

私から見ると、単刀直入に言えば、東アジア地域の方が、ASEAN より遅れていると思います。私たちは、ASEAN は東アジアより経済力がなく、むしろビハインドの国だと思いがちですが、あにはからんや、ASEAN を作り、東南アジアフォーラムを作って、国を超えてさまざまなネゴができる組織を一早く作りました。東アジア共同体のキャスティングボードは確かに中国と韓国と日本が握っているでしょう。しかし私は、この3ヶ国が張り合っている限りは遅れていくのではないかと、むしろ ASEAN を立てて、ASEAN を模倣していった方がいいのではないかと思います。言うまでもなく、EU 型の共同体がこの地域にできるとは思いません。しかしアジア独自の、ASEAN 的なルーズなネットワークは、形成可能なのではないかと思います。

そう考えると、東アジア共同体に ASEAN という視点をもっと組み入れて、東アジア地域の「ANEAN」を作っていくべきだと思います。そして ANEAN と ASEAN が合体して、やがて東アジア共同体になるということです。

その中で重要なのは、アメリカを入れなければならないということです。アメリカはもはや半分はアジアであり、アメリカを抜きにした東アジアは考えられません。アメリカはアジア太平洋国家として、19世紀末以来、この地域に重大な死活的な利害関心を持ってきました。私たちは、東アジア論をアジアだけで考えてはだめなのです。アメリカに応分にこの地域にコミットしてもらい、そして一方ではアメリカのアジア化を進めていくということです。

今回オバマ政権が米口の核削減に応じました。これはいろいろな解釈があり、リアルポリティクスから見れば、依然として核の有効性は十分あると思います。しかし、核削減にかじを切ったということは、アメリカとしても、国際協調を通じて、寺島議長の言葉を使うと「全員参加型の秩序形成」を作ろうとしているということだと思います。

もちろん APEC がありますが、私は APEC 以外に、ANEAN と言われている日中韓にアメリカを加えるべきと思います。それによって、ある種の安全保障と繁栄のための平和の、いわば多極的なネットワークを作るとことです。私はそれが可能だと思います。

かつて日本は、文明史的にはアメリカの軍門に下りました。そして、American Way of Life という、アメリカ的なシビリゼーションを我々は導入して、戦後大き

な繁栄を実現しました。

しかしその一方で日本は、やはりアジア的なるものを持っているわけです。しかし、そのアジア的なるものは何かということ、なかなか表立って言えなかった。それは戦前の歴史があるからです。しかし、今やっと、アジア的なるものにもう一回目を見開いて、寺島議長が言うとおり、片足をアメリカに、片足をアジアに置くことで、日本の姿というものが文明史的に見えてきます。もう十分アジアはアメリカ化しました。今度はアメリカがアジア化しなければなりません。

オバマという、白人系とアフリカ系、そして育った場所がインドネシアとハワイという、人種的にも混交・ハイブリッドの大統領はこれまでの合衆国の歴史ではなかったことです。アメリカは、ハイブリッド化が生きる道だと考えていると思います。ピュアなものを求めていけばいくほど、実は対立していきます。私たちも、ハイブリッドなものを国の中にどんどん取り入れながら、東アジアのある種のフュージョンを進めていかなければなりません。

その例が、最初に申し上げた旧東北三省で中国語、韓国語、日本語を話せる人々で、まさしくハイブリッドです。こういう中で初めて私は東アジア共同体が少しずつ作られ、本当の意味で形を成してくるだろうと思います。



7. 九州にAPIの支部を「アジア回廊」構想

残念なことに、東大の学生に聞くと、海外であればニューヨーク、ロンドン、パリ、あるいはミラノなら行きたいと言います。しかし、BRICsのアマゾンの中に入って行くという、かつて日本の商社マンがやったようなことはごめんだという学生が多いです。やはりそれだけ日本は豊かになって、ある種リスクなことができなくなってきたと思います。

そういうことを考えると、私はもっと日本の中にいる留学生を活用した方がいいと思います。留学生の中には日本で職を得たいという人はたくさんいます。そういうこともひっくるめて、私は寺島議長が、今後の東アジアにおいて重要な、様々な情報、知識、人的交流の拠点として関西の大阪を選ばれたというのは、正解ではないかと思っています。これはきちんとした理念があります。先ほど申し上げたとおり、日本列島1つとっても、橿円の2つの中心がなければなりません。また、アメリカですらも野放図な金融政策を引き締めて、証券と銀行の垣根をもう一回きちんと作り直そうとしています。東京は金融の大きな波が低調になった時に、意外ともろいのではないかと思います。大阪は、本来商都であると同時に、産業ではかなり小さな下請、中小、零細の企業が多いところです。そういう意味で、大阪に1つの拠点を置いて、ここがゲートウェイになるべきではないかと思っています。

また、私は熊本で生まれたので、「九州EU構想」をぶち上げているのですが、これは、博多・福岡を九州の中心として、

熊本にボンのような行政都市を作る、という構想です。九州で最大の都市である博多が百数十万人ぐらいなので、九州には大都市がありません。釜山ですらも300~400万人都市で、ソウル、上海、旅順、大連、台北も大都市です。

ではどうしたらいいかというと、九州は面で対抗するしかない。九州がゲートウェイになって、中国地方を通過して関西に流れる、ということが西日本でできればいいのではないかと思います。

そこで私は、大阪にAPIを作ったら、APIの支部を福岡に置いた方がいいのではないかと、寺島議長に会ったら提案したいと思っています。九州では、新幹線が縦で通るようになり、福岡から鹿児島まで3時間かからなくなりました。そして、韓国が今、新幹線が全面開通になります。将来はそれこそ夢のような話ですが、海底トンネルができ、九州の新幹線と韓国の新幹線とが連結すれば、その波及効果、観光に与える影響たるや膨大なものです。

問題は、寺島議長が言うとおりに、観光立国になるにしても、ある程度の富裕層を引っ張ってくることがメインにならないことでは。だから私は熊本県の蒲島知事に、阿蘇を開発して、バーデンバーデンのような、アジアの富裕層をねらった保養地にした方がいいと言っています。温泉がありますし、熊本大学に優秀な医学部、医療設備があるので、やり方次第で、いろいろな可能性があるのではないかと思います。

残念ながら、今までの日本には都市戦略がありませんでした。一方、韓国は小さい国なので、都市戦略を練ったわけです。仁川をハブ空港とし、その横には国

際的なタックスフリーの集積地をこれから作ろうとしています。また、済州島はマカオのような観光地にし、釜山は国際的なコンテナ都市にしよう、という具合です。残念ながら日本は、今までそれができませんでした。

今後日本は都市戦略を練って、とりわけ西日本をアジアのゲートウェイとして、人の流れを関西まで引っ張ってこることが必要だと思います。新幹線ができた以上、かなりの人が来ると思います。それと同時に、APIに、東アジアの知的な共有財産の拠点になって欲しいと思います。これは特定の主義主張のためではなく、東アジアのためです。中立的なシンクタンクであると同時に、情報発信の基地として、そしてここに来れば人材の交流も分かり、様々なシンポジウム、カンファレンスが行われている、という拠点になって欲しい。

場合によってはAPIのシンポジウムができる場所を阿蘇に作れば良いと思っています。医療設備を兼ね備えたバーデンバーデンのような、西日本最大のシンポジウムが行われる場所です。大阪だけで全部まかなうよりは、九州にそういう飛び地的なものを作った方がいいのではないのでしょうか。そうすることで、朝鮮半島から九州・中国を通じて関西までの回廊ができ上がります。私はこれを「アジア回廊」と言っています。

かつて、江戸時代に日本を訪れた朝鮮通信使が、まさしくこの回廊を通じて江戸まで行っていたのです。それによって様々な文明の交流が行われました。日本は江戸時代、決して鎖国国家ではなく、やはり東アジアとの交流を連綿としてやってきていました。それが、近代におい

てなくなっていました。これがいかにかに異常かというのは、長い歴史を見れば分かることです。今やっとそれが回復されつつあります。これを「新しい中世」と言う人もいます。私たちは、近代の国民国家の、国境線を後生大事にしていくような見方から離れて、失われた様々なネットワーク、文明の交流の足跡をもう一回発見する必要があると思います。



8 . A P I に期待すること

関西が江戸時代において栄えたのは、文明の交流ネットワークを作ってきたからです。先ほど紹介した中世史の大家である網野さんは、中世日本を固定的な農民社会として見るのは誤りで、百姓は農民だけではなく、海の民であったり、商工の民であった、そういったものを含めて、日本列島は中世社会を作ってきて、その交流が実は東南アジアまであった、と言っています。調べていくと、私たちが考える中世社会の固定的なイメージ、封建制社会による、人は移動せず、農民として生まれて一生涯そこで暮らすということが明らかに誤りだというのが、網野史学の言おうとしたことです。関西、特に大阪はまさしくそのようなことが行われてきた場所であり、だからこそ栄えたのだと思います。

もう一度、近代国民国家の中で作られてきたイメージから解放されると、回廊

が見えてくるとと思います。今後日本は少子高齢化が急速な勢いで進んでいき、数十年後に人口は1億人を割り、労働人口も減っていきます。多くの人は悲観主義に陥りますが、そんなことはないと思います。もう一度アジアのダイナミズムと触れ合うことで、いろいろな活性化の可能性は十分あると思います。

今後、API が知の拠点作りをしていくのであれば、サステナブルでなければなりません。日本には企業、官公庁、大学の研究所はありますが、一般の人々によって支えられ、その地域に根ざしているいろいろな公益的なサービスやミッションを果たすという、研究所は今までありませんでした。

私は、関西は東京と同じことをしてはだめだと思います。大阪は独自のものを持っており、東京とは違う道を歩んでいかなければなりません。その際、東を向くよりは西を向いた方がいい。そのようなことを通じて、API がこの関西において、知的な、そして国際的な交流拠点となることが重要です。それを支えるのは、大阪・関西にいる1人1人の人達だと思っています。

関西の人は、一旦腹をくくるととても真面目に、そしてひた向きにやってくれるという印象があります。API ができることは大阪のルネサンスになりますし、西日本の活性化や九州の盛り上がりにつながることにもなります。何とぞ皆さん、この大阪が、API を通じて繁栄していくことを願って頂ければと思います。

(文責：事務局)

第2回リレー講座から導かれるAPIが目指す姿（ポイント）

1．APIに期待すること

- APIが、留学生等の人材のフローをネットワーク型に活用できる場になることを期待する。
- APIが、東アジアのための情報発信の基地、そしてここに来れば人材交流ができ、様々なシンポジウム・カンファレンスが行われるという「知の国際交流拠点」になってほしい。
- APIが知の拠点づくりをしているのであれば、サステイナブルでなければならない。日本には、一般の人々によって支えられ、その地域に根ざして公益的なサービスやミッションを果たす研究所は今までなかったので、APIの設立に期待する。

2．APIへの提案等

- 大阪で全部まかなうよりは、九州に飛び地的なものを作った方がよいという観点から、APIの支部を福岡に置き、APIでシンポジウムができる場所を阿蘇に作るのはいかがか。そうすることで、朝鮮半島から九州・中国を通じて関西まで回廊（「アジア回廊」）がつながることになる。
- APIができることは大阪のルネサンスにつながり、ひいては西日本の活性化や九州の盛り上がりにつながるので、大阪・関西にいる1人1人がAPIを支えてほしい。

（文責：事務局）